

## 【研究ノート】

# ボア戦争からイースター蜂起へ

原 田 美知子

キーワード：ワイルド・ギース、ボア戦争、ジョン・マクブライド、イースター蜂起

### Summary

The year 2016 marks the 100th anniversary of the Easter Rising, the rebellion for Irish independence that changed the course of Ireland's history. A lot of events were held inside and outside Dublin. Also many articles and books on the Rising were published last year. However, it has seldom been pointed out that the Boer War was connected to the Easter Rising. This essay will show their connections.

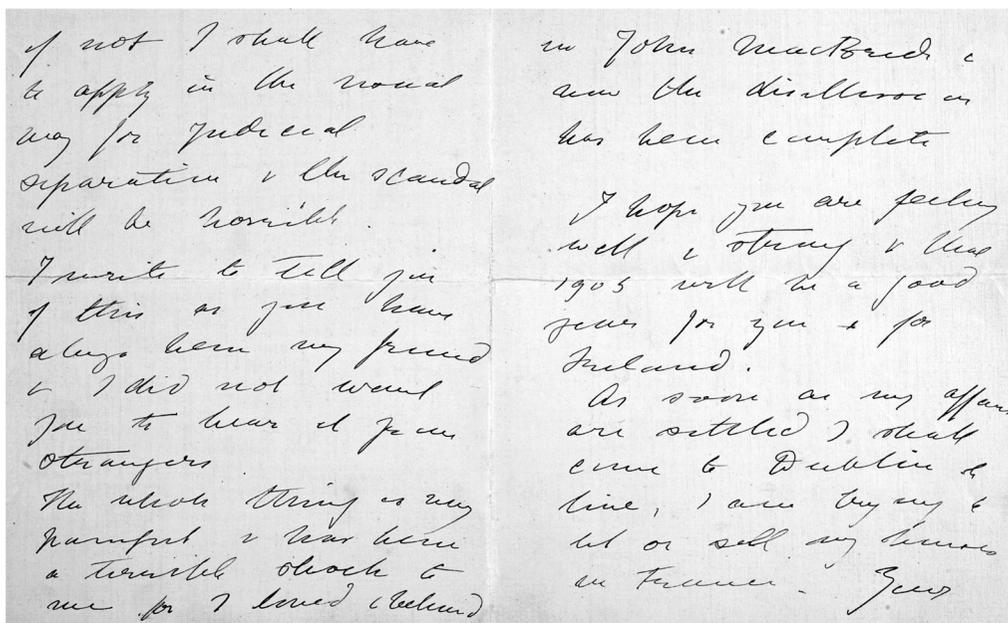
## I. ボア戦争

もう25年以上も前のこと、アイルランドの西の端、ディングル半島を旅していたとき、語り部 Peig Sayers (1873~1958) が暮らしていた、グレート・ブラスケット島に渡るつもりで、ダンキンという村に滞在した。ゴーシュ（ハリエニシダ）の黄色い花が咲き乱れる季節だった。

車一台がようやく通れるくらいの細い道の脇に、Kruger's と書いた大きなゲストハウスの看板が立っていた。それが、南部アフリカを舞台に繰り広げられたボア戦争の英雄で、トランスヴァール共和国の大統領もつとめた、Paul Kruger の名前であるのに気付いたのは、何年も経ってから、John MacBride の経歴を辿っていたときのことである。

マクブライドは、アイルランド文学を知る者には、詩人で劇作家の W. B. Yeats から、彼のミューズであった Maud Gonne を奪った人物として記憶されている。イエイツの求婚を何度も退けてきたモード・ゴンは、1903年の2月21日に、パリでジョン・マクブライドと結婚する。シングル・マザーで、かなり奔放に生きてきた彼女が、結婚を決意した背景にはこのボア戦争があった。のちにモードは、政治運動の師と仰ぐ John O'Leary に、手紙の中で次のように打ち明けている。「わたしはマクブライドのなかのアイルランドを愛していたのです。」<sup>1)</sup> (次頁写真)

ここでいうボア戦争とは、1899年から1902年まで、グレートブリテン<sup>2)</sup>とトランスヴァール共和国およびオレンジ自由国の間で繰り広げられた、第2次ボア戦争のことである。第1次ボア戦争(1880年-1881年)ではアフリカーナー側がグレートブリテンを退けたが、第2次ボア戦争では敗北し、アフリカ南部は、ほぼブリテンの支配下に入った。<sup>3)</sup>



(Courtesy of the National Library of Ireland)

ジョン・マクブライドは、この第2次ボーア戦争でマクブライド旅団 (MacBride's Brigade、正式名はアイリッシュ・トランスヴァール旅団 Irish Transvaal Brigade) を形成して、ブリティッシュを敵に回して戦った英雄ということになっている。<sup>4)</sup>

アイルランドの西に位置するメイヨー州ウェストポートから出て来て、当時としては稼ぎのいい薬剤師としてダブリンで働いていたマクブライド<sup>5)</sup>が、またどうしてアフリカ南部へと向かったのか。実は、この第2次ボーア戦争には、アイルランド人が敵味方に分れて相当数戦っている。そのわけは、一つにワイルド・ギースの伝統があった。

アイルランドはヘンリー2世の時代から、イングランドの植民地という立場に甘んじてきた。そして、ヘンリー8世による宗教改革以降、カトリック信徒が断然多いアイルランドにおいて、プロテスタントの優位を決定づけることになったのが、1690年のボイン河の合戦とその翌年の戦いである。

カトリックの元イングランド王ジェームズ二世が率いるアイルランドの軍隊は、プロテスタント王ウィリアム3世軍にボイン河で敗北したのち、大多数が故国を捨ててヨーロッパ大陸へ渡った。そこで、彼らはワイルド・ギース (Wild Geese) と呼ばれる傭兵となる。

その後もアイルランド人は、グレートブリテンに対して何度か反乱を企てるも失敗を繰り返し、その度に海外へ逃亡した者は、ワイルド・ギースの伝統に則って、先祖代々の敵であるブリティッシュと戦うために、外国の軍隊に入ることが多かった。

一方、700年の間に、アイルランドのブリテン化はどんどん進み、ボーア戦争時にはリクルートされたアイルランド人志願兵が、遠く離れた戦地でグレートブリテンのために戦っ

ていた。

祖国から10,000キロ以上も離れたアフリカ南部で、戦っていたのはアイルランド人同士だったというのは、まったく皮肉としかいいようがない。当時の詠み人知らずのバラッドがそれをよく伝えている。

On the mountain side the battle raged, there was no stop or stay;  
Mackin captured Private Burke and Ensign Michael Shea,  
Fitzgerald got Fitzpatrick, Brannigan found O'Rourke;  
Finnigan took a man named Fay—and a couple of lads from Cork.  
Sudden they heard McManus shout, 'Hands up or I'll run you through'.  
He thought it was a Yorkshire 'Tyke'—'twas Corporal Donaghue!  
McGarry took O'Leary, O'Brien got McNamee,  
That's how the 'English fought the Dutch' at the Battle of Dundee.<sup>6)</sup>

戦いの火蓋が切られた山腹では、止めも停まれもない。

マッキンが志願兵バークとマイケル・シェイ少尉を攻め落とした、  
フィッツジェラルドがフィッツパトリックを捕え、ブラニガンがオルークと出くわした；  
フィニガンはフェイという名の男と、コーク出身の若者二人を襲った。  
突然、マクマナスが叫ぶのが聞こえた、「手を上げろ、さもないと突き刺すぞ」  
ヨークシャーの「田舎者」だと思ったが、それはドナヒュー伍長だった！  
マクギャリーがオーリアリを捕え、オブライエンがマクナミーをつかまえた、  
そうやってダンディーの戦いで、「イングランド人はオランダ人と戦った」。(筆者訳)

ここに出てくる固有名詞は、地名以外はすべてアイルランド出自の姓だ。ポーア戦争はブリティッシュとアフリカーナの戦いだったけれど、戦地で流された血の多くは、アイルランド人のものだったことがわかる。

もっとも、アイルランドの兵士だけが南部アフリカにいたわけではない。19世紀にはブリテン軍に仕えるアイルランド人兵士の他に、宣教師もいたし、植民地警官隊として働くアイルランド人もいた。キャプテン・ムーンライトの名の下に、鉄道敷設を手伝う無法者たち、キンバリーのダイヤモンド鉱山で働く者、小売業を営むアイルランド人もいた。東トランスヴァールにアイルランド人たちが農地を所有していた記録も残っている。<sup>7)</sup>

1891年までに15,000から20,000人のアイリッシュがアフリカ南部に暮らし、そのうち約6,000人が第一世代といわれている。プロテスタントとカトリックの割合は同じくらい。ジョン・マクブライドが到着した1896年7月には、ヨハネスブルクに約1,000のアイルランド人がいたという。<sup>8)</sup>

では、ワイルド・ギースの伝統に従って、グレートブリテン寄りでない現地のアイルランド人たちや、自分と同じようにアイルランドからやってきた兵士を一つにまとめ、旅団

を組織したというそれだけの理由で、マクブライドはアイルランドの英雄となったのだろうか？

## II. アイリッシュ・トランスヴァール旅団

クロムウェルの侵攻以来、アイルランドの広い地域で、イングランド人の不在地主と小作人に成り下がったアイルランド人、という構図ができあがっていた。それに加えて、ボイン河の合戦の翌年に結ばれたリムリック条約は、国教会のみをアイルランドにおける合法的な教会とする一方で、カトリックに信仰の自由を認めていたにもかかわらず、その後、カトリック信徒の権利を制限する法律が次々つくられた。

その理不尽さ、不自由さから逃れるために自治権を獲得したい、あるいは独立を目指そうというアイルランドの人びとにとって、金やダイヤモンドを狙うグレートブリテンから介入を受け、攻め立てられている南部アフリカは、帝国に長いこと抑圧されてきた自分たちの姿と重なり合ってみえた。

第2次ボア戦争が、アイルランドのグレートブリテンからの分離・独立にどれだけ密接につながっていたかは、ダブリンでトランスヴァール支援運動に関わっていた面々を見ればわかるだろう。まず、1899年10月1日、ボア人を支持する集会在ヨハネスブルクとダブリンで同時開催されたとき、ダブリンの集会に参加した人の数は20,000ともいわれ、Michael Davitt、ジョン・オーリアリ、モード・ゴン、T. D. Sullivan、Arthur Griffith、そしてW. B. イェイツなど、各分野の著名人が含まれた。<sup>9)</sup>

それから一週間もしないで、アイリッシュ・トランスヴァール委員会が発足。会長にはジョン・オーリアリ、事務局にアーサー・グリフィス、Peter White、会員にはモード・ゴン、James Connolly、マイケル・ダヴィット、William Rooney、Pat O'Brien 等々が名前を連ねる。そして、イェイツも。<sup>10)</sup>

委員会発足の四日後、1899年10月11日に、ボア戦争の火蓋が切られた。

アイルランド系アメリカ人のJohn Blakeを司令官に据え、ジョン・マクブライド副司令官が率いたアイリッシュ・トランスヴァール旅団の構成数は、約100名と記述してあるものから、2,000とする刊行物まであり、正確なところはわからない<sup>11)</sup>。この旅団は、無給で戦うことを誓い、好きなときに出入り自由というボア人の義勇軍方式を採用していたこともあり、義勇兵の完全なリストは残っていないからだ。

だが、1899年9月から1900年9月までのある時点で旅団に所属していた義勇兵の名前と出身地を記載した一覧<sup>12)</sup>によると、義勇兵の数は263名にのぼる。

戦況は、日を経ずして、アイルランドに伝わった。当時グレートブリテンはアフリカ大陸の東西両岸に海底ケーブルをもっていたというから、情報が伝わるのはかなり早かったのだろう。<sup>13)</sup>

ツゲラ川を渡ろうとしたブリテン軍21,000人を、ルイス・ボータが指揮する8,000人のトランスヴァール共和国軍が待ち伏せして撃退したコレンゾーの戦いの二日後には、モー

ド・ゴン、アーサー・グリフィス、ジェイムズ・コノリーに先導されて、ボーア人を支援する群衆がトランスヴァール側の勝利を記念して、意気揚々とダブリンの町を行進したという。<sup>14)</sup>

その反対に、1900年3月3日、ボーア軍に包囲されていたレイデイスミスを、ブリテン軍が勝利解放した際には、アルスター地方のファーマナ州では、アイルランド聖公会（イングランド国教会のアイルランド版）が、周囲の湖に響き渡るような鐘を鳴らす一方、カトリック教会の鐘は沈黙していたらしい。<sup>15)</sup>

この戦争に高い関心を寄せていたのは、都市部の人びとだけではない。いやむしろ、政治的舞台から遠く離れた田舎の人たちこそ、筋金入りの判官最良だったと、ボーア戦争研究者の McCracken はいう。<sup>16)</sup> 文化も宗教も、自分たちとはまったく異なっているボーア人の勝利を、アイルランドの人たちは粗末な小屋で、熱狂して語り、耳を傾けた。両者に共通しているのは、制限の多い不便な生活と、ブリティッシュ嫌いという点だ。

イエイツやシングと共に、アイルランド文芸復興運動で活躍した Lady Gregory の自伝にも、こんなエピソードが残っている。地主階級の彼女は、アイルランド西部ゴールウェイ州にクール荘園と呼ばれる広大な敷地を所有していた。イエイツを初めとするアイルランドの文人たちがよく集まったことで知られているが、そのクール荘園で、使用人として雇っていた地元の女性に、グレゴリー夫人がベーコンをプレゼントしたときの会話である。

‘It will rise his [Mr Farrell’s] heart after the bad news that is after coming.’ ‘What bad news?’ ‘The Boers being beat.’<sup>17)</sup>

「これで悪い知らせに意気消沈していた主人も、少しは気が晴れましょう」「どんな悪い知らせ？」「ボーア人が負けているんですよ」（筆者訳）

冒頭に触れたダンキン村の看板も、アイルランドの西端に位置する田舎にさえ、トランスヴァール共和国大統領クリューガーの名が知れ渡っていたことを示す。「クリューガーズ」をインターネットで調べてみると、1894年にダンキンで生まれた Maurice Kavanagh という人物が始めたゲストハウスと出てくる。<sup>18)</sup> 熱烈なボーア軍のファンで、戦争ごっこをするときはいつもポール・クリューガー役を演じた。19歳のときにアメリカに渡り職を転々としたのち、26歳のときにダンキンに戻り、ポール・クリューガーの名にちなんだゲストハウスをオープンした。ディングル半島が、映画『ライアの娘』や『遙かなる大地へ』のロケ地になったとき、この「クリューガーズ」は有名人たちのたまり場になったという。モーリス・カヴァナ、通称クリューガー・カヴァナは1971年に亡くなったが、このゲストハウスはまだ健在で、伝統音楽のセッションなども盛んに行なわれている。

### Ⅲ. IRB

アイルランドとボーア戦争の結びつきは、弱い立場に置かれている者に対して、同情を寄せるだけの単純なものではなかった。それは、アイルランドの独立運動と深く関わっていた。

マクブライドたちが無給で戦っている裏で、トランスヴァールからアイルランド独立と共和国樹立を目的とする秘密軍事組織アイルランド共和主義同盟 IRB (=Irish Republican Brotherhood, 1858年3月結成) に金銭が渡っているという噂があった。<sup>19)</sup> 毎週開かれるアイルランド共和社会党の会合が、ボーア人を支持する方向に人びとを煽り立てる役目を担っていたともいわれている。<sup>20)</sup>

そのような状況下、1900年4月4日から26日まで、ヴィクトリア女王がアイルランドを訪問した。ボーア人支援運動を牽制し、アイルランド人のグレートブリテン軍への入隊勧誘を目的とするものと考えられた。

グレートブリテンの王室に対して、アイルランド人は愛憎入り交じった感情をもっていた、というか、ブリテン政府は嫌いだが、王室は好きというアイルランド人は多い。一方で、世界各地を植民地化して繁栄を極めた大英帝国を象徴する女王であり、アイルランド国教会廃止法にも反発したヴィクトリア女王を、強く非難する者もいた。

その女王がダブリンにやってきた。道路沿いにひしめく群衆。赤と白と青の旗が熱狂的に振られ、馬車が通り過ぎていくにしたがって上がる歓声。ボーア人支援を先導してきた人びとは、この日を境に、南部アフリカのことよりも自分たちはアイルランドの将来について、これまで以上に思いをいたす必要性を感じたようだ。<sup>21)</sup>

ボーア戦争はまだ続いていたが、アイリッシュ・トランスヴァール旅団にとって戦況は次第に厳しくなり、マクブライドと20名ほど生き残った兵士たちは、1900年9月23日コマティブルトの鉄道橋を渡ったところで、旅団としての使命を解かれた。<sup>22)</sup> 約一年間の軍務だった。彼らのほとんどは、アメリカへ向かい、モンタナ州、ネバダ州、コロラド州、カリフォルニア州の採鉱場で働いた。なぜなら、その多くは、もともと鉱夫だったからだ。

ジョン・マクブライドはというと、まずパリに着いた。そこで、青年アイルランド党の面々に引き合わされ、戦争体験について語るアメリカ講演旅行が計画される。そして、この旅行に出掛ける直前に、トランスヴァール共和国大統領、ポール・クリューガーがパリに到着した。

遅まきの支援を求めての旅だったが、クリューガーはパリの人々に熱烈な歓迎を受けた。マクブライドを支援するためにパリにいたモード・ゴンと仲間たちは、その群衆を掻き分けて、青年アイルランド党パリ支部からの正式な挨拶をクリューガーに伝えた。クリューガーはモードの肩に手を回しご満悦の様子で、「アイルランド人は戦うことによって、われわれへの支援を証明してくれました。アイルランドの突撃部隊はりっぱに働いてくれました」と応えた、とモードは回想している。<sup>23)</sup>

IRBに呼応するかたちで、1859年4月アメリカ合衆国内で組織された、フィニアン同盟

Fenian Brotherhood 会員であるジョン・デボイの紹介状を持って、マクブライドはアメリカへ向かった。しかし、彼は人前で話すのが苦手だった。この講演旅行にモード・ゴンはできるだけ同伴し、彼を励まし、なだめ、そして護ったのだろう。マクブライドに求婚されたのは、この旅の途中だったと、モードはのちに語っている。<sup>24)</sup>

約一年にわたるアメリカ講演旅行を終え、マクブライドはパリに戻った。落ち込み気味の彼が抱えていたものが、戦争後遺症なのか、彼の性格によるものなのかはよくわからないとされる。いずれにせよ、戦地から離れた日常生活は、マクブライドにとって容易いものではなかったようだ。

1902年にボーア戦争は、グレートブリテン軍の勝利に終わる。負けた側とはいっても、戦地での殊勲を讃えた剣やらトロフィー、銃などを、マクブライドは贈られた。<sup>25)</sup>そしてついに、1903年2月21日に、マクブライドとモード・ゴンはパリのヴィクトル・ユーゴー区(現パリ十六区)にあるアイラウのサントノーレ教会で、旅団付き牧師の司式により、結婚式を挙げた。<sup>26)</sup>

しかし、この結婚は周囲が心配していた<sup>27)</sup>とおり、長続きしない。気の強い二人のことだ。性格の不一致も歴然としていた。マクブライドはいつも酔っ払っていて、使用人や義理の娘に対して露出狂めいた行為をしていることが発覚し、モード・ゴンは別居を決意する。しかし、短い結婚生活の中で、これまたあつという間にできた息子ショーンの親権をめぐる交渉が決裂したため、モードは離婚への法的手続きを進めて行くことになった。

初めからうまくいかないか誰かが思っていた結婚を、なぜモード・ゴンが決行したかについては諸説あって、先述したモードのオーリアリへの告白もあれば、マクブライドと協力して要人暗殺計画を企んでいたとか、元愛人のルシアン・ミルヴォアへのあてつけだった、あるいはイエイツへの、などいろいろあるのだけれど、それが彼女の運命だったと思わずにいられない出来事が、何年かしてから起こる。イースター蜂起である。マクブライドは再び、英雄になったのだ。

#### IV. イースター蜂起

イエス・キリストの復活を祝うイースターは、春分のあとの満月に続く日曜日に祝われる。日本ではクリスマスを知らない人はいないけれど、イースターはというと、毎年ちがう日にあたる移動祝祭日のせいもあってか、知らずに過ごしてしまうことも多いだろう。

クリスチャンにとって、復活祭はもっとも大切なイベントである。殊に北半球では、長い冬のあと、やわらかく降り注ぐ陽の光や、淡い花の香りを運ぶ風、枯れた枝や大地から芽吹く緑、鳥の囀りに、待ち望んだ春の訪れを喜ぶ気持ちと重なり合って、一旦は失われたものが復活するという出来事は、とてもドラマティックに感じられるにちがいない。

今から百年前、1916年のイースターは4月23日だった。その翌日、イースター・マンデーと呼ばれる日に、事件は起きた。グレートブリテンからの独立を求め、アイルランド共和国を樹立する目的で、アイルランド義勇軍や市民軍が中心となって、ダブリンの中央

郵便局を拠点に、武器を手に立ち上がったのだ。そこには、七百年以上の間、本国の支配下にあったアイルランドが、いよいよ復活するのだという強い意志が感じられる。

時代背景を少し振り返ろう。1914年8月に第一次世界大戦が始まり、グレートブリテンおよびアイルランド連合王国議会で、アイルランドに自治を認める法案はペンディングになっていた。アイルランド議会党の党首レドモンドは、自治法案を承認させるには、グレートブリテン軍にアイルランド兵を送っておいた方が、のちのちいいだろうと考えた。一方、ナショナリストの急進派は、「本国が困難に直面しているときこそ、アイルランドのチャンス」という昔からの戦略を踏襲したかった。

それに、すでに1913年8月に、蜂起を予感させるような出来事が起こっていた。ダブリンの労働者は、過酷な状況で働かされ、厳しい生活条件の中で生きていた。

雇用者のいいなりになって働いていた労働者を結束させ、組合を作る動きが、James Larkinを中心に起こる。ラーキンは、アイルランド移民の両親の元に生まれたりバプールの港湾労働者で、組合を組織するためにベルファストに派遣され、その後、ダブリンに回された。ラーキンはアイルランド運輸一般労働組合 (the Irish Transport and General Workers' Union) を組織し、1911年から1913年にかけて、組合員は4,000人から10,000人に膨らんだ<sup>28)</sup>。

もう一人の重要人物は、同じくアイルランドからの移民の子である、エディンバラ出身の社会主義者、ボーア戦争時、アイリッシュ・トランスヴァール委員会会員でもあったジェイムズ・コノリー。彼はラーキンと一緒に、アイルランド労働党を作った。この二人が中心になり、労働者が労働組合を結成する権利を求めて、雇用者と激しく対立した。ジム・ラーキンの呼びかけで労働者のストライキが始まると、雇用者はロックアウトで対抗した。ロックアウトは、1913年の8月26日から1914年の1月18日まで続くが、最後は連合王国労働組合会議 (British Trade Union Congress) から同情ストライキを断られ、資金援助もストップされたため、飢えた労働者が職場に戻ることによって、終息した。

アメリカへ渡ってしまったラーキンに代わって、ロックアウト騒動で逮捕されたのち、マウントジョイ刑務所から出て来たコノリーは、ITGWUの書記長になり、この後、イースター蜂起のリーダーの一人となる。

イースター蜂起は、上層部の意見が分れて、蜂起の日時が正確に伝達されなかったり、ワシントンとの暗号が傍受され、着くはずの武器を載せた船が沖合で拿捕されたりと、混乱を極めた。ダブリンの町は破壊され、修復されたばかりの中央郵便局は見る影もなく、少年兵も戦死した。無辜の子供たちも四十人、戦火に巻き込まれて、死亡した。蜂起は六日間続いたのち、グレートブリテン軍によって鎮圧され、失敗に終わった。

当時この蜂起に対するダブリン市民の反応は、ばかなことをしてくれたという声と、よくやったという声と賛否両論あったといわれる。その様子は、ロディ・ドイルの小説 *A Star Called Henry* 『星と呼ばれた少年』に臨場感をもって描かれる。十四歳のヘンリーは少年兵として、市民軍に加わっていた。蜂起が失敗に終わり、ブリテン軍の兵士たちに警

備されながら、尋問を受けるためリッチモンド兵舎まで行進するヘンリーたちに、野次馬たちはつばを吐きかけ、罵声を浴びせ、腐った肉を投げつけた。

They hated us. They absolutely hated us. I could feel it, a heat coming off them. The British were protecting us. I didn't blame the women. It was the first anniversary of the first Battle of Ypres; many of them were in mourning for their husbands. And I didn't blame the others. They were starving, some of them homeless, and a slum was better than no home at all. They wanted to tear us with their own nails and teeth. There were men around me sobbing.....I saw other men hanging back, and women, faces behind the angry ones. Sad faces, looking out at us. Standing there to let us know: they didn't all hate us.<sup>29)</sup>

人々はぼくらを憎んだ。ものすごく憎んでいた。それを肌を感じた、人々の放つ憎しみが熱かった。ブリテン軍がぼくらを守っていた。ぼくはその女たちを責めなかった。イーブルの戦いのまさに一周年。女たちの多くは、戦死した夫を追悼していた。それだけでなく、ぼくは他の人たちも責めなかった。人々は飢えていたし、住むところのないものもいた。ホームレスよりスラムのほうがまだ。人々は爪と歯で、ぼくらを引き裂きたがっていた。ぼくの周りの男たちはすすり泣いていた……後ろの方にいる男たちが見えた、女たちも、怒っている人たちの背後に顔が見えた。悲しげな顔、ぼくらを眺めている。そこに立って、ぼくらに知らせていた：ぼくらを憎んでいる人間ばかりじゃないと。(筆者訳)

首謀者とみなされた15人は、5月3日から12日にかけて、キルメイナム刑務所の壁の前で、銃殺刑に処された。その中の一人が、ジョン・マクブライドだった。彼は、この蜂起について、実は何も知らされていなかったという。<sup>30)</sup> たまたま月曜日の朝に、グラフトン・ストリートを歩いていたら、アイルランド義勇軍の一人、文人でもあり教育者でもあった軍服姿のThomas MacDonagh とばったり出会い、蜂起を知らされた。マクブライドはその場で参加を表明し、ジェイコブズ・ビスケット工場に立てこもり、マクドナの下、副司令官として戦った。共和国宣言にも、マクブライドの署名はない。

ジェイコブズ・ビスケット会社といえば、当時、ギネス醸造会社と並び、ダブリンの二大ブリテン企業の一つだった。ジェイコブズ・ビスケット会社の従業員の労働条件はかなり悪く、1913年のロックアウトのときも、女性従業員たちが一致団結して、経営者相手に戦ったことは、ダブリン市民の記憶に新しかっただろう。反乱軍がブリテン軍に應戦した四カ所の陣営の一つが、このジェイコブズ・ビスケット・ファクトリーだった。

蜂起の第三拠点、ボーラン製粉所で指揮を執った、アメリカ国籍をもつ Eamon de Valera が処刑を免れたのとは対照的に、首謀者ではなかったマクブライドが処刑された背景には、対ブリテン、ボーア戦争で功績を残した危険人物としてマークされていた事実が、影

響したようだ。<sup>31)</sup>

蜂起自体は失敗したけれども、ろくな軍事裁判も行わずに、首謀者15人（同年8月に反逆罪で絞首刑になったロジャー・ケースメントを入れると16人）を処刑したブリテン政府の対応に、蜂起に批判的だった人びとも態度を一変させた。イースター蜂起のリーダーたちは、町を破壊した愚か者から、一躍、アイルランドの自由のために命を落とした殉教者となった。

離婚同然の状態で暮らして来たモード・ゴンの中で、マクブライドが英雄として甦った瞬間だった。

マクブライドの死後、モード・ゴンは一生喪服を着て過ごしたといわれる。<sup>32)</sup>

## 注

- 1) National Library of Ireland, Ms 8001 (34), Maud Gonne's letter to John O'Leary, n.d.83-4. 左ページ最終行から右ページ1行目にかけて (I loved Ireland in John MacBride.)。
- 2) 本稿では、1707年合同法によりイングランド王国（ウェールズ含む）とスコットランド王国が合同したグレートブリテン王国をグレートブリテンまたはブリテンと呼び、グレートブリテン王国が成立する以前の本国を、イングランドと呼ぶ。また、1801年の併合法により、グレートブリテン王国がアイルランド王国を併合したのちに成立した「グレートブリテン王国およびアイルランド連合王国」は混乱をさけるため、そのままグレートブリテン王国、またはグレートブリテン、ブリテンと呼ぶ。
- 3) 「アフリカーナー」は17世紀半ば以降、主としてオランダからやってきた移民の子孫たちを指す。古くは「ボーア」と呼ばれていたが、これは「農民」という意味であった。  
1602年に設立されたオランダ東インド会社がアフリカ南端のケープタウンに、オランダ船のための補給基地を建設したことから、植民地の建設が始まった。1795年、オランダ本国がフランス革命軍に占領されたのを機に、フランスによるケープ支配を未然に防ごうとしたブリテンが、オランダからケープ植民地の支配権を奪った。以後、アフリカーナーとブリテンが、領土拡大や、金、ダイヤモンド鉱山の利権をめぐる、争うことになる。ブリテン統治への反発から、アフリカ内陸へ集団移動したアフリカーナーが建設したトランスヴァール共和国を、ブリテンが併合しようとして第一次ボーア戦争が起こった（1880年）。ブリテンはポール・クリューガー率いるトランスヴァール共和国軍に惨敗したが、南部アフリカにおけるアフリカーナー勢力の拡大を阻止し、その覇権を再確立するために、アフリカーナー共和国である、オレンジ自由国およびトランスヴァール共和国を相手に、第二次ボーア戦争に突き進んでいった（1899年）。
- 4) Donal P. McCracken, *MacBride's Brigade*, 70.
- 5) *Ibid.*, 18.
- 6) Malvern van Wyk Smith, *Drummer Hodge: the Poetry of the Anglo-Boer war 1899-1902*, 83-4.
- 7) McCracken, 15.
- 8) *Ibid.*, 14.
- 9) *Freeman's Journal*, 2 October 1899
- 10) R. F. Foster, *W. B. Yeats—A Life I. The Apprentice Mage*, 223.
- 11) McCracken, 31.
- 12) *Ibid.*, 170-181.
- 13) Tom Standage, *The Victorian Internet*, 160.
- 14) McCracken, 58.

- 15) Ibid., 69.
- 16) Ibid., 74.
- 17) Augusta Gregory, *Seventy years, being the autobiography of Lady Gregory*, 374-5.
- 18) <http://www.gokerry.ie/locations/dn-chaoin-dunquin/>
- 19) McCracken, 81.
- 20) Ibid., 72.
- 21) Ibid., 85.
- 22) Ibid., 137.
- 23) Maud Gonne, *The Autobiography of Maud Gonne—A Servant of the Queen*, 341.
- 24) Ibid., 342.
- 25) McCracken, 150.
- 26) R. F. Foster, 286.
- 27) Gonne, 348-9.
- 28) Conor Kostick & Lorcan Collins, *The Easter Rising*, 82.
- 29) Roddy Doyle, *A Star Called Henry*, 137-8.
- 30) Desmond Ryan, *The Rising: the complete story of Easter week*, 168.
- 31) McCracken, 163.
- 32) Nancy Cardozo, *Maud Gonne*, 341.

#### 参考文献

- Cardozo, Nancy. *Maud Gonne* (New Amsterdam Books, 1978)
- Doyle, Roddy. *A Star Called Henry* (Penguin Books, 2004)
- Foster, R. F. W. B. *Yeats: A Life I. The Apprentice Mage* (Oxford University Press, 1997)
- Gonne, Maud. *The Autobiography of Maud Gonne: A Servant of the Queen*, ed. by A. Norman Jeffares and Anna MacBride White, (The University of Chicago Press, 1994)
- Gregory, Augusta. *Seventy years, being the autobiography of Lady Gregory*. (MacMillan, 1976)
- Kostick, Conor. & Collins, Lorcan. *The Easter Rising* (The O'Brien Press, 2000)
- McCracken, Donal P. *MacBride's Brigade: Irish Commandos in the Anglo-Boer War* (Four Courts Press, 1999)
- Ryan, Desmond. *The Rising: the complete story of Easter week* (Golden Eagle Books, 1949)
- Standage, Tom. *The Victorian Internet: The Remarkable Story of the Telegraph and the Nineteenth Century's On-line Pioneers* (Walker Books, 1998)
- van Wyk Smith, Malvern. *Drummer Hodge: the Poetry of the Anglo-Boer war, 1889-1902* (Oxford University Press, 1978)
- Ward, Margaret. *Maud Gonne* (Harper Collins, 1993)
- スタンダード、トム。服部桂訳『ヴィクトリア朝時代のインターネット』(NTT出版、2011)
- ドイル、ロディ。実川元子訳『星と呼ばれた少年』(ソニー・マガジズ、2004)
- トンプソン、レナード。宮本正興、吉國恒雄、峯陽一、鶴見直城訳『南アフリカの歴史』【最新版】(明石書店、2009)
- 峯陽一。『南アフリカ「虹の国」への歩み』(岩波新書、1996)